9/7(土) まいど！倫々号です。台風の影響で日中36℃とか、熱中症対策しましょう。親の労苦はつかみにくいとか、簡単に分らないのが親の愛とか、どうすればいいのでしょう。幸せ鳥アホ鳥

九日度一句、「感謝ーて させていただく バースデー」

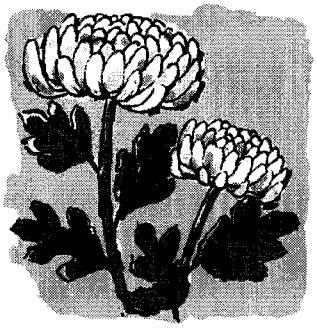
今週の倫理 1150号 2019.9.7 ▷ 9.13

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載します。

9月のテーマ | 親祖先への感謝

親祖先への感謝を

丸山竹秋



自分自身の生命。この体、この手、指、爪、みな親からきたものだ。この頭脳、この考え方……みんな同じ生命の分かれである。

「それは分かっている」と思っている。「感謝しないことはない」とも思っている。しかしはたしてそうだろうか。涙を流して、ありがたいと思ったことがあるのだろうか。

「ありがたい」とは、まことに平凡な言葉である。しかしこれほど心の奥底に響く真実の声は少ないのではなかろうか。サンキュー、メルシー、ダンケ、スパシーバ、シェーシェなど。お互いに、どこでも同じように用いられているではないか。われとわが涙を流して、親の生命に対し、そしてまた親を生んでくれたそのまた親、さらに祖先に対して「ありがとう」と素直に感謝できることは、まことにすばらしいと思う。その涙を流した人が、はたして何人あるだろう。

自ずから親を思い、親を慕い、そして親に感謝する涙……これは真実のものとして万人の心の底に深くしまいこまれているのだ。だれでもそれをもっているのだ。その涙を流すことがないというのは、まだそうした人生の深所に入り得ていないからであろう。

親の生命がこの世からなくなった時、流れ出ずる熱い涙、その経験を経て、初めてわれに返りうる時がある。まっ暗な坑道に閉じ込められ、何日もかかってやっと救出され、日の光を見た時、太陽とはこれほどありがたいものであったかと、涙が出るほどの思いをする。

子を思わない親はなく、太陽は生物を親のごとくはぐくみ育てようとするが、その愛情やエネルギーが常に豊かでありすぎるために、かえって日常ではそれほどには感じない。

わが生命の働きは、無限に大きい。そのすばらしい生命の一つを与えてくれた――いや自ずからにしてわが生命のもとになっている――その親に対し、祖先に対し、いかほど感謝をしても感謝しすぎることはないのである。

今、自分が親祖先に対し「感謝はしているよ」という程度の感謝は、まだまだほんの入口のところにすぎないであろう。それがわかるほどの自己測定――これをいつももつことが、その人の内容を深めるのである。「オレはよく知っている」「オレはもう十分やっている」ということほど、うすっぺらなものはない。それほど太陽のエネルギーというものは分かりにくく、親の愛情というものも、つかみにくいものがある。そしてそこにこそ、また人生の味わい、深みというものがある。

ちょっとやそっとで、簡単に分かってしまうようなものには、大したものはなく、そのようなものばかりでは人生はつまらない。

（『丸山竹秋選集』より）

一般社団法人 倫理研究所 法人局

え・城谷俊也